

『帝王のいけにえ』

著：桜樹かれん

ill：タカツキノボル

寝室に入る。

何故、寝室なのか……もちろん、裕斗はなにも分かっていない。

部屋の中央に置かれたキングサイズのベッドに近寄って、裕斗を抱いたまま器用にカバーを外す。

一面のシーツの海に裕斗をそうっと降ろしてから、静はゆっくりと詰襟の胸元を緩(ゆる)め始めた。

「帝王…さん？」

鈍感で総天然ぼけな裕斗だが、さすがにおかしいと感じ始めていた。抱かれて運ばれた先がベッドだ。しかも、服のホックを外している。ときは夜…、そしてふたりきり……。

「なにしてるんですか」

「見ればわかるだろ。服を脱いでるんだ」

「ぬ……脱ぐって、それ…」

静は上着を床に放り投げると、今度はYシャツのカフスポタンに指をかけた。

危うい前兆を肌で感じた裕斗はズルズルと——静とは反対方向に——身体をずらしていく。

「本当にかわいいね、裕斗」

いきなり名を呼び捨て妖しく微笑む静には、校内での爽(さわ)やかかつ、優美にして慎(つつ)ましやかな帝王の面影は影を潜め、夜の魔性こそ似つかわしい危険な艶やかさが漂っていた。

「豹…豹(ひょう)変(へん)してる……」

「ん？」

「学校での帝王さんと全然違う……どうして??」

「部屋に戻れば、帝王の仮面は脱ぎ捨てる。素顔の綾小路静となるのさ」

「あの…あの……」

静が怖い。理屈ではなく本能で直感する恐怖だ。このままでいると、とんでもないことが起こってしまいそうである。とにかく、この場から逃げなければ。

ベッドからおりようとする裕斗に、服を脱ぐ手を一旦止めた静は、冷ややかな眼差しを返した。

「動くな」

「ひえっ……」

いきなり命令され、全身が竦んでしまったところを、たやすく押さえつけられる。

「なに…、なにを…」

静は片腕で裕斗を抱きかかえるようにして、もう一方の手でシャツを除きにかかる。

「待って……なにをするんですか？」

「セックスに決まってるだろ。聞くまでもない」

「そ…そんな」

「今日からおまえは、おれのかわいい生け贄だ」

静はなにやら意味深に、そして嬉しそうに笑う。

「い…生け……生け贄？」

心拍数の上がった心臓がさらに激しく脈打って、今にも破れそうである。

頭上に大岩が降ってきたような耳鳴り。そして、衝撃。眼の前はもちろん真っ暗だ。

気付かぬところで生け贄として扱われていたのだから。

「なぜ、ぼくが…」

「それはね、おまえがとってもかわいいからだ」

答えになってない…、と裕斗は思った。

でも、かわいいといわれて一瞬、気が緩んだ。ひょっとして、ちょっと嬉しそうな表情になってしまったかもしれない。この状況ではおかしすぎるのだが。

「その顔……本当におれ好み」

静はキスをしようと唇を寄せるが、裕斗は顔を逸らして阻止をする。大切なファーストキスを守るのに必死なのだ。

「お願いですから……やめてください……ってばー」

「おれが嫌い？」

「まさか、そんな…学園中の生徒から尊敬と憧れを一身に浴び、帝王と呼ばれる貴方を嫌いだなんて。ぼくももちろん憧れてます。でも、こういう趣味はないです」

「生け贄(おまえ)の趣味など関係ない」

甘く冷たい声が、耳元で無情に響いた。

「逆らっても無駄だ。今日からおまえはおれのものになるんだから」

「あの…、ボク……困ります」

「何故だ」

不服そうに、素肌へ指を這わせてくる。

「ひっ……」

いつの間に脱がされたのだろう。すでに上半身は裸にされていた。動転していたせいで気付かなかっただけ。

「…帝王さんは全校生徒から崇められ、慕われる立派な方でしょう？ どうして、こんなひどいことをするんですか？」

瞳をめいっぱい潤ませて、裕斗は訴えかける。

「おまえがかわいいからだといったろう。聞こえなかったのか？」

「でも……でも…」

気の弱い裕斗ではあるが、まとわりついてくる静からどうにか逃れようと必死だった。

肩口をしっかりと捕(とら)えられてはいるけれども、腕は押さえられてはいない。そして脚にも自由度がある。逃げるなら今だ。

裕斗は四肢をバタつかせ、渾(こん)身(しん)の力を振り絞(しぼ)って懸命にもがいた。これでもかこれでもかと喚(わめ)きながら暴れまくった。

逆らう理由はただひとつ。セックスは男と女でするものだと裕斗は思っているからだ。

静がどれほど美しく優れていても、男である事実には変わりはない。だから従えない。

「ふうーん、大人しくいいなりになると思ったのに…」

「やー、やですー！」

か細くて小さな身体のどこにこれほどのパワーがあるのか、“窮(きゆう)鼠(そ)猫を嚙(か)む”とはまさにこのことか、と思わせるほどの力でもがき続けた。

けれども。

「無駄だ。おれからは逃げられない」

静は腿(もも)を蹴(け)られたり、胸をドンドン叩(たた)かれたりされながらも余裕で笑う。

幼い頃から様々な武芸をたしなんできた静にとって、裕斗の抵抗など取るに足りないものだからだ。

「いい加減にしないか」

静は裕斗の上にまたがると、スキをつけて両手首を掴み上げた。頭上に掲(かか)げながら、全体重をかけグッと押さえつける。

「あ…」

もう、ピクリとも動けない。身体を揺すっても微動だにしないのだ。どれほど抵抗したところで体格が違いすぎる。力でかなうはずもなかった。

「やだ……」

裕斗の両眼から涙が溢れてきた。しかし、涙ごときで静は怯(ひる)まない。

「観念しろ」

「許してください……」

「そんなにおれがいやか」

違う、そうじゃなくて……と泣きながら弁明するが、逆らってくること自体に静の帝王としてのプライドが傷ついていた。

学園内はもとより、どこに行ってももてる静である。

男であれ女であれ、誘って断られた記憶はもちろんない。それどころか、誰もが誘ってほしいという秋波を送ってくる。

けれども、裕斗だけが違う。静にしてみれば、自分が惹(ひ)かれた相手にこうも拒否をされるなど耐えがたい屈辱だった。

「見逃して……ください…」

瞳を濡らし訴えかけてくる裕斗に、無言のまま静は首を左右に振る。

「ぼく、どうあっても、やられちゃうんですか？」

「そうだ」

「こんなに頼んでも……ですか？」

「くだい。これ以上抵抗するなら縛(しば)るが、その方がいいのか？」

「しば……る？」

「両手両脚をベッドにくくりつけて……それからじっくり攻める…」

「あ………」

——ダメだ…かなわない……

どうあっても逃れられない諦(あきら)めと共に、裕斗の身体からスウーっと力が抜けていった。

「分かりました…」

ギューッと硬く眼を閉じて、覚悟を決める。

「いうとおりになりますから……優しくしてください」

声を震わせ、そうお願いをした。

セックスの知識に乏(とぼ)しい裕斗は、今からどんなことをされるのかよく分からないけれども、縛(いまし)められてしまう恐怖を考えれば、素直に従うのが自分のためだ。

「もちろん、優しく愛してあげるよ」

「あと……電気を…」

「ん？」

「電気を消してください。明るいと、恥ずかしいです」

今どき女でもいわないような奥ゆかしいセリフを耳にして、静はますます欲情する。いやだといわれると、もっとしたくなるのは男の性(さが)だ。

「だめだな。その恥ずかしいところは全部見せるんだ」

「そんな……」

なにひとつ、自分の思うとおりにならない状況が悲しくてたまらない。そんな裕斗を楽しそうに静は辱(はずかし)めていく。

わなわなと震える唇にキスをする。

固く閉ざした唇を強引に割り広げれば、裕斗はこわごわ口を開いた。

静は舌を奥深くまで差し込み裕斗の舌を絡(から)め取る。

それから強く吸いあげる。

「んっ…」

つん……とした痛みを感じて、裕斗から呻(うめ)き声が漏れた。

唾(だ)液(えき)を流し込めば、むせそうになりながらも全部を呑み込んだ。

静が、首筋を指先でなぞるように幾度か行き来させると、

「あん……」

喉(のど)の奥でかみ殺したような吐息が辛そうである。

「くすぐったい」

生まれて初めて味わう感触に、違和感を覚えているようで、モゾモゾと身体をくねらせ必死で耐えている。

淡く色づいた桜の乳首をとらえ、唇でつえばむとそれはキュウと硬く尖る。でも、感じている風ではない。

刺(し)激(げき)に肉体が形状を違えただけで、裕斗自身は悶(もた)えるでもなく、ただはらはらと涙を落としながら身を横たえているに過ぎなかった。

本文 p61～69 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>